

イラクに今自衛隊がいる。治安は悪くテロは日常的だ。派兵していたスペインで鉄道が爆破された。自衛官に何かあったら、日本は撤退できるか。

そんな局面で改めて戦争とは何か、イマドキ戦争体験はどう継承されるかを考えるのも、無駄ではないだろう。

女子学院中学校「祖父母の戦争体験」編集委員会編『15歳が受け継ぐ平和のバトン——祖父母に聞いた235の戦争体験』（高文研、3150円）は、ずっしり重い。「親から子」ではなく「祖父母から」の聞き書きだ。

軍隊生活・疎開・大空襲、満州・ジャワ・シベリア抑留、もんぺ・千人針・日の丸弁当と、記憶は多彩だ。別れと出会い、いのちにこだわる文章が多い。「私が今ここにいること」「一歩の命」「生き抜くという強さ」と実に真面目だ。企業戦士として青春を送り、芥川賞を読んで若者を知ったつもりで団塊世代こそ戦争体験風化の元凶と思いが知らされる。歴史に正面から向き合う娘たちに、未来の希望を託せる。

鶴見俊輔・上野千鶴子・小熊英二「戦争が遺したもの——鶴見俊輔に戦後世代が聞く」（新曜社、2940円）は、同じジャンルの思想史バージョン。「語り」のうまさに引き込まれる。書かれたものを前提に、書かれざるものを吐き出させようとする聞き手の鋭い問いを、祖父母世代の元「不良少年」が、がっちり受けとめ真剣勝負する。

政治家だった父への反発、厳しい母、優しい姉の刻印したもの。「家」との格闘が自立の拠点になりうることを、15歳の米国留学、ジャワの「慰安婦」体験、「思想の科学」創刊から平連脱走兵援助にいたる軌跡に即してあぶりだす。

ついでに佐野碩の亡命、佐野学の転向など異端の親族への想いも聞き出してほしかったが、タヌキや「がきデカ民主主義」へのこだわり、藤田省三の査問を掘り起こし、連夜の雑談テープまで記録に残した聞き手の辣腕に脱帽。上野千鶴子が女性観で突っ込むと、なにやら論理が混濁してくる「不良老人」の初々しさが面白い。

「聞き取り」という手法の可能性と極限を試した逸品である。すべての世代が、それぞれ何かを得るだろう。

歴史書の棚

「聞き・語る」手法が伝える
祖父母世代の
生きている戦争体験

かとう 加藤
そつろう 哲郎

新曜社